

『喜びの知らせをあなたに』

使徒言行録 第5章12〜26節

(ローマの信徒への手紙 15章 13節)「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とでああなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせて」くださいます。主イエス・キリストの御名によって祝福をいたします。

今日、この主の日に頂いています使徒言行録 第5章12節に「使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われた」とあります。「使徒たちの手によって」、聖書はそう記します。使徒言行録を書いたルカは、決して「使徒たちは、多くのしるしと不思議な業をした」とは書きませんでした。福音記者ルカにははつきりと見えていました。「多くのしるしと不思議な業」を行なっておられる神様・主イエス・キリストが見えていました。見えていましたので、ルカは「手によって」と記しました。

使徒たちは、主イエスに用いられて、多くのしるしと不思議な業を行なったということです。ですから、今の時代には奇跡なんかはないのだと言う人もいますが、それは、私たち人間が奇跡を行なうと思ってしまうからです。奇跡、不思議

な御業は、神様がなされるのです。神様がその御業をなさる時、そこで用いられたのが、使徒であり、またキリスト者でありました。

私たち人間の生きる世界は、限界、限りがあるのが当たり前の世界です。生きていくうえで、様々な壁があります。その壁を前にして人は苦しみを抱き、それを重ね、やがては、解決ない場所へと置かれてしまったような錯覚を起こしてしまいます。自分はその壁の向こうを歩んで行くことはできない、そう思わされてしまうのです。その壁が高ければ高いほど、厚ければ厚いほど、です。自分の人生に見切りをつけてしまいます。それは、自分に与えられた命を軽んじることにもなります。しかし、神は、そのような世界に住む人間に御業をなされます。神様が、その壁を一つ一つ壊していかれます。しかも、聖書は、「民衆の間で行われた」と記されています。神様を信じている人の間で、ではありません。全ての人の間で、です。それは神様が全ての人を御創りになり、愛されているからです。全ての人は、神様に愛されています。ですから、人は本来、その生涯を、喜びをもって生きていくことができるのです。それが約束されているのです。

そう言われると私たちは思うところがありま

す。「しかし、人間は、いつも喜びをもって生きていけないではないか」と。これは、神様を知らない人、信じていない人だけのことだけではありません。もちろん、イエス・キリストを信じて、キリスト者になったけれども、やはり苦勞することが多い。神様はおられるのだろうか、という思いをもつことも確かにある。それは、なぜなのか。それは、私たち人間が、神様がおられる。神が、生きて、働いておられることを全存在において信じ抜くことができないからです。神様に愛されていても、その愛を忘れさせるような出来事を前にしてしまうと、その愛を忘れてしまう。神様への信頼が遠のき、不安になってしまう。それが、人間です。キリスト者であっても、そうなるってしまうのです。

神様が、キリストが見えなくなった私たちに、忘れたままになってしまわないように、不安になつたままでないように、神様は、私たちに奉仕をして下さいます。神様の御奉仕、それは私たちが主日礼拝、主の日の礼拝と呼んでいる、この礼拝です。

神様の愛が現われている救いの出来事「主イエス様の十字架の死と復活」を聞く礼拝において、神様が私たちに奉仕をして下さいます。私たち

の父である神は、私たちが御前に招いてくださり、聖霊によって命の糧である御言葉を私たちの内に届けてくださいます。そして、神様を「わたしの父」、「わたしたちの父」呼び、祈り、賛美しようとする心を、そして言葉を御与えくださいます。全てにおいて、神様が私たちに奉仕を下されます。私たちがもっていたものではないものを神様は持たせてくださるのです。

この礼拝を生きるための土台としてもつ人は、イエス・キリストの十字架を見つめて生きていく人です。神の愛を見つめ、頂き、生きていく人です。神の愛に生かされていることを知る人です。12節の後半に「**一同は心一つにしてソロモンの回廊に集まっていた**」とありますように、初めの頃の教会は、群れも小さく、社会的にも弱い存在でしたので、神様に依り頼むことしかできませんでした。教会はこのことを忘れてはなりません。のちの時代に、キリスト者が多くなり、社会的にも大きな影響力を持つようになると、聖書を軽んじたり、礼拝を単なる儀式としてしまったのもキリストの教会だったのです。

私たちの九州連合長老会は、一五十七年に起こりました宗教改革を記念いたしまして、講壇交換を実施して、礼拝を奉げることをしております。

教会のこのような行事と言いますか、計画と言いますか、これは大変すばらしい、と思います。それは、キリストの教会での、礼拝において、実際に御語りになるのは神、主イエス・キリストであることを私たちは知るからです。岩住牧師が説教をした、福田牧師が説教をした、ではないのです。確かに教会で、目に見える形で礼拝の講壇で奉仕をしてしますのは、それぞれの牧師ではありませんが、12節に「**使徒たちの手によつて**」とありますように、牧師も神様に遣わされた者として、用いて頂いています。そこでは、主イエス様が、かたくなな心になりやすい私たちのために、私たちが訪ねてくださり、語ってくださっているのです。

私たちが礼拝で、朗読された聖書の言葉と説教をあわせて、御言葉と言いますのは、この信仰が与えられているからです。ですから、そこでは、主イエスの十字架、復活によつてもたらされた「**救い**」が語られます。それを聞くことができます。ですから、教会は、そうではない事が語られた時、それを語っている人が、主イエス・キリストから遣わされた人かどうかを見極めることができます。

使徒たち、キリスト者たちは、一つになって。それはそのいる場所だけではなく、人はそれぞれ

違いを持っておりませんが、その心一つにして、主イエス・キリスト、父である神を礼拝してしました。神様が、御自分が生きておられること、そして、キリストの群れを支えるために、多くのしるしと不思議な業をもつて御働きくださること、キリストの福音を宣べ伝えることができることに感謝をしたのです。

しかし、そこに冷や水を浴びせるように、13節があります。「**ほかの者はだれ一人、あえて仲間に加わろうとはしなかった**。しかし、**民衆は彼らを称賛していた**」とあります。神様、主であるイエス様を信じて、神の愛を知り、良い人たちが多くいたのでしよう。キリスト者の群れは民衆にはほめ称えられていました。民衆には、といま申しましたが、そうでない人々がいました。その人たちは、17節以下にはつきりと出てきます大祭司やその仲間たち、エルサレム神殿の偉い人たちです。さて、13節、14節は御聞きになられて、不思議な思いを抱かれた方もおられるかもしれせん。「13ほかの者はだれ一人、あえて仲間に加わろうとはしなかった。しかし、民衆は彼らを称賛していた。14そして、多くの男女が主を信じ、その数はますます増えていった。」

ほかの者という人たちが、エルサレム神殿の偉

い人たち、指導者層の人たちであり、民衆は、いわゆる指導者たちではない人々のことです。しかし、ここでは、あえて「民衆」と「ほかの者」という言い方がされています。「指導者たち」と「民衆」とは書いてないのです。救い主を求める人と救い主がいなくても生きていけると思った人が記されています。

民衆は、使徒たちが起こす不思議な業によって、神様が生きておられることを身をもって知りました。また、キリスト者の群れに好意を持っていました。そこから、多くの男女が、主イエスをキリスト、救い主と信じ、教会の群れの一員となりました。

そこでも、使徒言行録を書いたルカは言葉を丁寧に書き記しました。それは、新共同訳では、14節の最後のところは「増えていった」ですが、本来は「加えられた」と書かれています。ルカは、全てにおいて、神様の御業を見ております。神様がここでも、この時も、あの時もお働き下さった。その感動が使徒言行録を記しと言われるルカにはあるのです。ですから、使徒言行録を書き上げることができたのです。これは、ルカだけの特別なものの見方ではなく、キリスト者すべての人の、ものの見方です。「くした」、「くできた」ではなく、

「くさせていただいた」です。

つまり、神様を信じて、キリストを信じて、初めて人は、この世の正しい見方を知ることができるといふわけです。同じ事なのですが、信じて初めて、神様が生きておられる、キリストが生きておられるということがわかるのです。だから、私たちは、神に、キリストに感謝をしているのです。神の御働が見えているのです。

神様が、すべてにわたって、私、私たちに働いて下さることを知ることは、ものの見方が変わるだけではなく、その人の生き方そのものが変わります。キリストの愛に生かされて歩む人。喜びの知らせをもって生きる人。神様は、その人を今度は、喜びの知らせ、福音を隣りに語る者として、その人を用いられます。その人、そのキリスト者の歩む道をわたしも歩みたい、そのような人を神さまが起こされるのです。

口で語るのは苦手だと言う人であっても、礼拝に生きる生き方が雄弁にイエス・キリストを物語っています。キリストの愛を知る人の生き方、存在そのものもまたキリストの福音の伝道となるのです。ただ、私は思います。私の生き方を見て、イエス・キリストを信じてください、と生きるのも素晴らしいと思うのですが、自分の口で「十

字架につけられたイエスという救い主を私は信じています。」と言った方が、ずいぶん簡単なのでと思います。何しろイエス様は、伝道することを種まきに譬えておられました。一粒一粒、種を埋めていくではないのです。蒔いたのです。当時のユダヤはそうでした。

ユダヤの民衆の多くの男女が、神様の御招きによって、キリストの群れに加わります。しかし、これを歯ざしりして見ていた者たちがいました。17節に「大祭司とその仲間のサドカイ派の人々」がそれであると書いてあります。彼らは妬みに燃えていたと書いています。使徒ペトロたちは自分たちが殺した主イエスの弟子です。大祭司たちの心が、神様の方を向いてはいないことを指摘された主イエスを彼らは憎み、神様を心から信じておられ、民衆の人気の高かったイエス様をねたみ殺した大祭司たちです。再び、彼らの醜い姿が、ペトロたち、主イエスの弟子たちによって、あばかれていくことを大祭司たちは嫌いました。

大祭司たちは、一度は失敗しました。その事は第4章に書かれています。一度は失敗しましたが、大祭司たちは、ペトロたちを押さえつけ、黙らせるのは簡単だ、と思っていました。人間の最も恐

れる死をちらつかせれば、それは簡単だと思っていました。大祭司たちは、ペトロたち、つまり人間が、教会、群れをつくったと思っていました。神様が生きて働かれることを知らない者にとつてみれば、人間を黙らせることは簡単だと思うのです。しかし、ペトロたちの師である主イエスは、神の子であり、神がお遣わしになられた御方です。主イエスが私たちの罪を担い十字架で死なれ、その死からよみがえられたことは、すべて私たちの救いの為です。救いの道が開かれることは、神様の御計画でした。

牢に捕らえられるということは、自分の命をその牢屋を管理、支配する者の手に渡すことになります。その本当であれば、牢屋という絶望しかない所に、ペトロたち、使徒たちのもとに、主の天使が訪れます。神様は、愛する者が絶望のままにいて悲しまれます。必ず、助け、希望を与えてください。天使は主の御言葉を告げます。「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と。イエス・キリストの福音を人間が聞いて受けとめる事。これに勝る希望はこの世には有りません。なぜなら、死に勝つ命を人は頂くことが無ければ、最後は絶望で終わってしまうからです。命を得る。人間の喜びはこれ

に尽きるのです。主イエス様は、御使いを送られ、このキリストの福音、命の言葉が広がっていく事を、神様が大きい望んでおられる事を知っておられます。人が生きる。神様が、世の初めから、御望みになっておられたことが実現するのです。主イエス・キリストが、あなたに、命の言葉を届けるのに一所懸命なのです。

キリストの福音を伝える者が捕らわれている。教会も祈ります。ならばと主が動かれます。

牢役人、大祭司たちは、牢に入れて、裁判にかけ、あとは刑罰を与えるだけ、という自分たちの手の中に置いたはずであった使徒たちが、何事もなかったかのように、神殿の境内でキリストの福音を語っているのを聞いて驚きとまどいます。

人の計画を神の計画が打ち砕きます。主イエス・キリストの御働きがあつて、人はキリストの福音を宣べ伝えることができます。私たちが聞いているのは、主イエスが御働きくださり、使徒たちが伝えた、キリストの福音です。神の救いがそこにあります。私たちの命がかかっています。私たちが福音を聞くことができたのも、信じることができたのも、主イエスがわたしを訪れてくださったからです。

救いを、私たちが選び取ったもの、勝ち取ったものではないからこそ、私たちは神の慰め、主イエスの慰めを受けます。神の子、主イエス・キリストによって、この私たちが、死に勝ち、復活されたキリストのものにならせて頂いています。私たちは、神の御計画として生きる事になっているのです。神様の御計画に生きている皆さん、また、命の言葉を告げる、神様が遣わされる新しい牧者を心一つにして祈り、神の時を待つておられる皆さんは、主の安らぎの中で、これからも命の言葉を頂く事になっています。

お祈りをいたします。

二〇二四年11月10日 宮崎中部教会主日礼拝